佛教大学　仏教学部論集　第106号（2022年３月）

論　文

アシュヴァゴーシャ・アンソロジー

――鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品――

松　田　和　信

〔抄　録〕

『大智度論』や『坐禅三昧経』などの鳩摩羅什による漢訳文献には、インドの仏教詩人アシュヴァゴーシャ（馬鳴）の創作とみなされる詩作品が何のクレジットもなく、そのまま韻文で、あるいは散文化して大量に埋め込まれていることが筆者による梵文『三啓集』写本の解読研究によって判明している。『三啓集』の偈の多くは、元はアシュヴァゴーシャの失われた『荘厳経論』の偈であった可能性が極めて高いが、本稿では、鳩摩羅什文献に確認され、これまで未発表であった『荘厳経論』と推定される偈を『三啓集』から抜き出して和訳とともに紹介する。

キーワード　三啓　坐禅三昧経　大智度論　荘厳経論　無常経

1　三啓経（tridaṇḍa）と三啓集（*Tridaṇḍamālā*）

本題に入る前に、本稿に至る筆者の一連の研究をまとめる[1]。西暦671年から695年にかけてインドを訪れた義浄（635-713）の旅行記『南海寄帰内法伝』によると（大正54巻227a13-17）、当時のインドでは、専らアシュヴァゴーシャ（Aśvaghoṣa, 馬鳴, 2世紀）によって編纂された「三啓（tridaṇḍa）」が読誦されていた。三啓（三啓経）は三段より構成され、阿含経典を挟んでその前後にアシュヴァゴーシャが作った詩作品（偈）を配した読誦用の文献であり、三段をもって開く（啓く）から「三啓」と称すると義浄は伝える。同じ義浄が翻訳した『根本説一切有部律』では「誦三啓」の記述が複数認められ、葬送時に「三啓無常経を誦す」とも伝えるが（大正24巻287a2）、これは義浄訳『無常経』（大正801、敦煌写本では『無常三啓経』大正2912）を指している。確かに義浄の言うように、漢訳『無常経』には経典の前後に三帰依偈を含む複数の偈が配されている。

東アジアの仏教世界では、これまでは三啓経として義浄訳『無常経』だけが知られていたが、11世紀にアティシャ（Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna）によってインドからチベットに持ち込まれ、ポカン（sPos khang）僧院に保存されていた梵文写本 *Tridaṇḍamālā*（三啓集）には、義浄訳

『無常経』に対応する三啓経だけでなく、全体で40種の三啓経が記されている。この写本については、写本の奥書に「アシュヴァゴーシャ作」の記述が認められ、それを現地で実見した1938年のラーフラ・サーンクリトヤーヤナ（Rāhula Sāṅkrityāyana）の短い報告と、ラーフラの後、1939年にポカン僧院を訪れて写真を撮ったイタリアのツッチ（Giuseppe Tucci）の伝える情報が、義浄の『南海寄帰内法伝』あるいは『根本説一切有部律』の記述との関連を伺わせ、学界でもこの写本は注目されて、ツッチによる出版を心待ちにした研究者は多かった。しかし、写本の出版を予告したツッチもそれを果たさず、今に至るまで写本の詳細は不明のままであった。このような中、筆者は2018年の夏にローマのツッチ・コレクションからツッチの撮影した写真を、独ゲッチンゲン大学のラーフラ・コレクションからツッチのネガの別焼きとラーフラ自身が撮影したごく一部の写本写真を取り寄せ、独ミュンヘン大学の友人イェンス＝ウヴェ・ハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）を誘って解読を開始した。写本は115葉からなる貝葉写本で[(2)]、写本の年代については、書体から判断して、アティシャと同時代に東インドで書写された写本であることは確実である。解読開始から3年が経過し、筆者はすでに数篇の論攷を発表し、現時点では未刊ではあるが、ハルトマンも2編、筆者との共同論文も2編が近々刊行される予定である。なお、この梵文写本によって、義浄が「三啓」と訳した「啓」の原語がダンダ（daṇḍa）であったことが確認されるが、義浄の言うように、この語は、経典を挟んで三段に分かれる三啓経の一つの段を表していると思われる。80年前に撮られたツッチの写真の状態は万全ではなく、解読不能の箇所も多く、現時点では115葉すべての細部にまで目を通したわけでもないので暫定的なことしか言えないが、種々の例外はあるものの、原則として、40種の三啓経は以下のような構成になっている。

1）第１ダンダ
　　1.1）三帰依偈（複数偈）
　　1.2）1.3のアシュヴァゴーシャ偈を導入する一偈
　　1.3）2の阿含経典に関連するアシュヴァゴーシャ作品偈（複数偈）
　　1.4）阿含経典導入の一偈
2）第２ダンダ―阿含経典
3）第３ダンダ
　　3.1）3.2のアシュヴァゴーシャ偈を導入する一偈
　　3.2）2の阿含経典に関連するアシュヴァゴーシャ作品偈（複数偈）
　　3.3）3.2のアシュヴァゴーシャ作品偈をまとめる一偈
　　3.4）ブッダの教えを讃える定型偈（複数偈）

上記の中で、第1ダンダと第3ダンダはすべて偈であり、散文の文章は一切認められない。恐らく『三啓集』全体では偈数は1500を超えるであろう。第1ダンダの冒頭に置かれる三帰依偈は

40種の三啓経ですべて異なるが（例外もある）、第3ダンダ末尾の3.4の偈はブッダの教えを讃える共通の偈から、各三啓経で任意の偈が複数置かれている。40種の三啓経がすべてアシュヴァゴーシャの手によって編纂されたのであれば、義浄の伝えるように、三帰依偈も含めたすべての偈はアシュヴァゴーシャ作となるのかもしれないが、阿含経典の偈や別の人物の偈が使われている箇所も多くあり、偈のすべてをアシュヴァゴーシャ作と認めることはできない。ただ、現在までの解読から言えることは、1.3と3.2以外の偈は各三啓経の編纂に際して新たに作られた偈の可能性が高く、その多くはアシュヴァゴーシャ以降に説一切有部教団内で作成されたものであると筆者は推測する(3)。

このように偈のすべてをアシュヴァゴーシャに帰することはできないが、第1ダンダと第3ダンダの核心部となる1.3と3.2に使われた偈については、その三啓経の編纂者がアシュヴァゴーシャ自身であったとしても、そうではなかったとしても、既存のアシュヴァゴーシャ作品から複数の偈を借用して用いた可能性が高い。実際解読を進める中で、1.3と3.2の箇所にはアシュヴァゴーシャの真作と認められる4つの作品、つまり、ブッダの生涯を描いた『ブッダチャリタ（*Buddhacarita*）』と、ブッダの異母弟ナンダの改心と解脱を描いた『サウンダラナンダ（*Saundarananda*）』の二つのカーヴィヤ作品、およびドイツ探検隊の将来したトルファン写本コレクションから断片的に梵文が回収された上演用の台本である『舎利弗劇（*Śāriputra-prakaraṇa*）』に加えて、失われた『荘厳経論（*Sūtrālaṃkāra*）』の偈が多く含まれていることが確認されている。この中には、『ブッダチャリタ』第14章の後半以降の原典が失われている箇所から多くの梵文原典が回収されることも貴重ではあるが、筆者が最も大きな発見と考えるのは『荘厳経論』の偈である。

『荘厳経論』はカーヴィヤ調の韻文で綴られた阿含経典解釈論とみなされているが、失われて現存しないので、1.3と3.2に含まれる未知の偈の多くを『荘厳経論』に同定することは容易ではない。しかし筆者の研究によって、他文献における引用から、『三啓集』に使われた如来十号と戒について解説する二箇所のまとまった偈が『荘厳経論』の偈であることがすでに確認されている。さらに意外にも、それら二箇所のまとまった偈の同文が韻文と散文で鳩摩羅什によって5世紀初頭に漢訳された『大智度論』に埋め込まれていることも明らかとなった(4)。なお、『大智度論』では、これらの対応文に対してアシュヴァゴーシャの名も作品名もクレジットは一切付けられていない。従って『大智度論』を読むだけでは、それらの文章が元はアシュヴァゴーシャの失われた作品の偈であるなどという想像すら働くべくもないが、『三啓集』の解読によって、『大智度論』の文章が、アシュヴァゴーシャ作品を借用して羅什が『大智度論』の本文に埋め込んだことが判明したのである。しかも、同様の例は『大智度論』だけでなく、他の鳩摩羅什訳文献にも及んでいることが明らかとなった。本稿では、各三啓経の1.3と3.2に含まれる偈で、『大智度論』以外の文献も含めた羅什訳文献との対応文を持つ未発表の偈をランダムに取り上げて「アシュヴァゴーシャ詩文集」としてまとめておきたい。

2　インド語原典に逐語的に対応しない羅什訳文献

鳩摩羅什によって漢訳された多くの仏教文献は、東アジアの仏教世界では余りにも著名であるが、その中には、原典となったインド語文献をそのまま単純に翻訳したとは思えない文献が複数存在する。それらを大正蔵経の番号順に示せば以下の五文献である。

1. 佛垂般涅槃略説教誡経（佛遺教経）大正389（大蔵蔵12巻）
2. 坐禅三昧経　大正614（大蔵蔵15巻）
3. 菩薩訶色欲法経　大正615（大蔵蔵15巻）
4. 禅法要解　大正616（大蔵蔵15巻）
5. 大智度論　大正1509（大蔵蔵25巻）

この中には、大正蔵経の一段分にも満たない『菩薩訶色欲法経』から巨大な『大智度論』まで分量的にも様々で、アシュヴァゴーシャを含む複数のインド禅師の説を羅什自身がまとめたという『坐禅三昧経』や、『ブッダチャリタ』第26章の第25偈から第88偈までを経典のスタイルで散文訳したと思われる『佛垂般涅槃略説教誡経（佛遺教経）』、さらに『菩薩訶色欲法経』に対しては羅什訳であることに疑義が出されているなど[5]、内容もそのスタイルも翻訳事情も多岐にわたる。また、最も重要な『大智度論』についても、筆者の研究より前から、アシュヴァゴーシャ作品と同内容の偈が韻文で引用、あるいは散文で用いられていることがすでに明らかにされていた[6]。さらに最近では『禅法要解』にも『サウンダラナンダ』第16章の第6偈から第38偈に至る33偈が散文化して埋め込まれていることが田中裕成氏によって発見されている[7]。このように、鳩摩羅什訳文献とアシュヴァゴーシャの関係を窺わせる資料はすでに複数知られていたが、『三啓集』写本の解読によって、従来知られていた例は氷山の一角にすぎないことが明らかとなった。本稿で紹介する偈は、稿末の『無常経』の偈を除くと、全部で13偈にすぎないが、今後の解読次第ではこれも氷山の一角となる日が来るであろう。これらの鳩摩羅什訳文献については、鳩摩羅什自身の著作であるなどと筆者が考えているわけではないが、それらに正確に対応する「単一のインド語テキスト」は存在しなかったものと思っている。羅什独自の判断が加わって切り貼りされたり、韻文が散文に変えられたりして翻訳された文献であろう。そのような判断の中で、当時のインド文化圏ではあまりにも有名で、羅什も含めて僧侶の誰もが常識のように諳んじていたはずのアシュヴァゴーシャ作品を埋め込むという事態が漢訳に際して起こったに違いないと筆者は考える。

3　羅什訳文献に現れる荘厳経論の偈

『三啓集』写本の解読で見いだされたアシュヴァゴーシャ作品偈の中から、羅什訳文献に対応文のある偈をランダムに13偈提示するが、便宜上、それらを3種のグループに分ける。**A**）

鳩摩羅什訳文献中に偈で翻訳された例、**B**）散文で翻訳された例、**C**）原文通りの翻訳ではないが、内容的にその偈が背景に存在するとみなせる文章の3種である。これらの偈は5種の羅什訳文献の『坐禅三昧経』〈**略号-坐禅**〉、『菩薩訶色欲法経』〈**略号-欲法**〉、『大智度論』〈**略号-智度**〉に含まれる。なおここで紹介する偈は、元はアシュヴァゴーシャの失われた『荘厳経論』の偈の可能性が高いと筆者が判断している偈だけであり、『三啓集』に見いだされた『ブッダチャリタ』および『サウンダラナンダ』の偈は取り上げない。すでに発表した2つのグループの偈と異なり（本稿注(4)）、これらの13偈が、元は『荘厳経論』の偈であるとの直接的な証拠はないかもしれないが、羅什訳文献に含まれるのであるから、これらの偈の作成は5世紀以前に遡り、内容的にもアシュヴァゴーシャ作品に相応しいと筆者には思える。文体や用いられた単語も経典の偈とはまるで違う。アシュヴァゴーシャ作品に親しんだであろう鳩摩羅什の漢訳文献に含まれているという事実自体がこれらの偈の出自がアシュヴァゴーシャ作品であったことを証明しているのではないかとさえ思っている。しかも『ブッダチャリタ』でも『サウンダラナンダ』でもないのであるから、可能性は『荘厳経論』しか残らないのではないか。今後、これらが『荘厳経論』の偈であるという直接的証拠が見いだされることを願っている。ここでは、『三啓集』から読み取った梵文テキストと羅什の文章、さらに梵文テキストの和訳を添え、必要な解説を加える[8]。

A）偈で翻訳された例

[1] nāśaṃ yāsyati sadrumauṣadhivanā bhūr bhūtadhātrī yadā
śoṣaṃ toyanidhir gamiṣyati yadā merur yadā bhetsyate｜
sthānañ coccataraṃ hutāśanavaśād brāhmaṃ yadā dhakṣyate
brūhi sthāsyati kiṃ yadāgnivihitaḥ svargo 'pi na sthāsyati ‖

大地草木皆磨滅　須彌巨海亦崩竭
諸天住處皆燒盡　爾時世界何物常（智度229a）

創造物の母であり、木や草や森のある大地が滅に至る時、海が干上がる時、メール〔山〕が崩れる時、より高い梵〔天〕の住処も火によって燃える時、天界も火に破壊されて残らない時、一体何が残っているか言いなさい。

第9三啓経および第38三啓経の第1ダンダに共通して現れる偈である（Ms. 17r3, 105v4-5）。韻律は一つのパーダが19音節からなる Śārdūlavikrīḍita である。劫末の世界崩壊を描いているが、羅什はこの偈をパーダ毎に見事に翻訳していると思う。ただし出典は示されない。この偈は『ブッダチャリタ』第20章第35偈と内容的に同じである[9]。アシュヴァゴーシャはこの偈を短くリメイクして『ブッダチャリタ』に用いたのであろう。筆者の友人の齊藤隆信佛教大学教授は、鳩摩羅什訳では押韻しているから、この偈を羅什自身の作だと言うが[10]、梵文原典が発見された今となっては、そのようなことはありえない。羅什は諳んじていたアシュヴァゴーシャ

作品、恐らく『荘厳経論』の偈を韻を踏んで素直に漢訳しただけであろう。

[2] śreyo'rthinā na khalu bhāvyam anudyamena
kausīdyasaktahṛdayena sukhātmakena｜
kausīdyam aśvakapunarvasukau hi kṛtvā
dṛṣṭvāpi buddham avaśau narakaṃ prapannau ‖
以是衆罪故　懶心不應作　馬井二比丘
懈怠墜悪道　雖見佛聞法　猶亦不自免（智度173b）

至福を求める者は、努力せずに安楽を本質とする懈怠に著した心の者であってはならぬ。〔六群比丘の〕アシュヴァカ（馬）とプナルヴァスカ（井）の二人は懈怠を為して、ブッダに見えていたのに力なく奈落に堕ちた(11)。

第15三啓経第1ダンダの偈である（Ms. 30v1-2）。韻律は Vasantatilakā（14×4）である。智度ではこの偈の前に複数の偈が引用されている。まだ誰も指摘していないが、その中には『サウンダラナンダ』第16章第95-96偈と同内容の偈の漢訳が含まれる。同じ第15三啓経の第3ダンダには、智度に引用される精進を説く6偈が並んでいるが、既に別稿（松田2019）で紹介したのでここでは取り上げない。その6偈も『荘厳経論』と見なしうる偈である。

B）散文で翻訳された例

[3] pavanacala iva prabhātadīpas tarur iva lolaśipho nadītaṭasthaḥ｜
jagad idam avaśaṃ praṇāśadharmi sravad iva jarjarabhājanastham ambhaḥ ‖

風で揺れる（pavanacala）夜明けの灯火（prabhātadīpa）の如く、川の斜面（nadītaṭa）にあって不安定な根（lolaśipha）をした樹木の如く、壊れた器（jarjarabhājana）にあって漏れ出る水の如く、力なきこの世間は滅亡の性質を持つ。

[4] bījaṃ pitā kṣetramayī janetrī varṣāṇi karmāṇi śubhāśubhāni｜
bhūtāni sasyapratimāni loke jātāni jātāni lunāti kālaḥ ‖

種子は父であり、畑は母であり、雨は善不善の業である。収穫に相当する世間の有情たちは生まれてもすべて時が刈り取ってゆく。

この2偈は［1］と同じく第9三啓経および第38三啓経の第1ダンダに共通して現れる偈である（Ms. 17r5-v1, 106r2-3）。2偈は二つの三啓経で連続して置かれている。韻律は［3］が Puṣpitāgrā（12+13×2）、［4］が Upajāti（11×4）である。智度は先の［1］を偈で訳すが、そのすぐ後で、［3］を以下のような散文で埋め込んでいる。

［3］世間轉壞。如風中燈。如險岸樹。如漏器盛水。不久空竭。如是一切衆生。及衆生住處。皆無常故名爲無常。（智度229a）

智度には［3］の偈だけ対応文が見られるが[12]、坐禅では六尋を説明する項で［3］［4］の2偈が次のように散文で連続して現れる。

［3］譬如嶮岸、大樹上有、大風下有、大水崩其根土。誰當信此樹得久住者。人命亦如是。少時不可信。［4］父如穀子。母如好田。先世因縁罪福如雨澤。衆生如穀。生死如收刈。（坐禅274c）

『サウンダラナンダ』第15章は、欲（kāma）瞋恚（vyāpāda）不善（akuśala）親族（jñāti）国土（janapada）不死（amṛta）という六尋（ṣaḍ-vitarka）を修行者が取り去ることを主題とするが、坐禅では『サウンダラナンダ』と同内容の偈を用いて、韻文と散文化した文章を組み合わせて六尋（坐禅での訳語は「覺」）が説かれる。『サウンダラナンダ』における六尋の偈の多くが坐禅に使われていることを発見したのは松濤誠廉であった（松濤1954）。智度では、［3］の偈が散文で埋め込まれた箇所で六尋が説明されるわけではないが、坐禅では、［3］［4］の2偈は不死尋の項で連続して上記のような散文で現れる。ただし、この2偈は『サウンダラナンダ』の偈ではない。従って、この部分については松濤誠廉が取り上げることはないが、坐禅の六尋の項で『サウンダラナンダ』から多くの偈が用いられているという松濤の発見も、それが確かに『サウンダラナンダ』の偈であったかどうか、三啓集から対応偈が発見された現在では見直す必要がある。これについては本稿第４節の『無常経』の偈を紹介する項で筆者の考えを述べよう。次に提示する五つの偈も六尋と関係する一連の偈である。

[5] yathā bhuktaṃ vāntaṃ svayam abhilaṣed bhoktum aghṛṇas
tathotsṛjya jñātīn punar abhilaṣed draṣṭum adhṛtiḥ｜
kva cedaṃ kāṣāyaṃ svajanagṛhasaktaṃ kva ca manaḥ
sthito jñātisnehe yadi bhavati mukto na bhavati ‖

無精者（aghṛṇa）が吐いた食べ物を自ら食べることを欲するように、不堅固な者は親族を捨てても再び〔親族に〕見えることを欲する。〔出家者の〕その袈裟と親族や家に執着する心には大きな違いがある。もし親族への愛着にとどまるなら解脱することはない。

[6] anitye 'smin loke jananamaraṇāvartavihate
paro vā bandhur vā suciram api bhūtvā na bhavati｜
calatsthānair bhūtair divi bhuvi ca tiryakṣu satataṃ
pravṛttau lolāyāṃ svajana iha kaḥ kaḥ parajanaḥ ‖

生と死の回転（āvarta）に砕かれた無常なるこの世間において、他人あるいは親族として長きにわたって存在したとしても、〔来世で再び他人や親族に〕なることはないのである。天界でも地上でも畜生界でも、常に揺れ動く状態の有情たちには、動揺する〔輪廻の〕流転の中で、ここで誰が親族で誰が他人であろうか。

[7] yadā visaṃjñaḥ sthiraniścalekṣaṇaḥ prasaktahikkaḥ śvasanārtaceṣṭitaḥ｜
tamo mahac chvabhram ivopanīyate tadā kva dārāḥ kva sutāḥ kva bāndhavāḥ ‖

大穴（mahat śvabhra）の如き闇（tamas）に導かれるように、意識を失い、硬く不動の目になり、しゃっくり（hikkā）が止まらず、荒息に苦しみもがく時、その時、妻はどこに、子供はどこに、親族はどこに。

[8] ayaṃ janena svajanīkṛto janaḥ punaḥ praṇāśe na janībhaviṣyati｜
janasya kasmād api ca svatā jane janena yoktuṃ na hi śakyate janaḥ ‖

〔生まれる時〕この人は〔別の〕人によって親族にされた。死ぬ時には再び親族にならないであろう。その人の所有権は誰からその人にあるのか。実に人が人と結ぶことは不可能である。

[9] ihāgato 'yaṃ kam api pralabhya hi pralabhya cehāpi punar gamiṣyati｜
gataś paratrāpi janaṃ pralapsyate pralabhya sarvaṃ kṛpaṇo bhaviṣyati ‖

この人は〔前世で〕誰かを欺いてこの世にやって来た。この世でも〔誰かを〕欺いて再び去ってゆく。他世へ行っても人を欺くであろう。すべてを欺いて貧者となるであろう。

この5偈は第22三啓経の第1ダンダの偈である（Ms. 53v3-54r1）。韻律は［5］［6］が Śikhariṇī（17×4）、［7］［8］［9］が Vaṃśastha（12×4）である。この5偈について、坐禅では［3］［4］で述べた六尋の中の親族尋（jñātivitarka, 坐禅での訳語は親里尋）の解説において、前述の松濤の指摘する『サウンダラナンダ』と同文に見える偈が終わった後、「如阿羅漢教新出家戀親弟子言」という導入文を挟んで、すなわち阿羅漢が新人出家者に説いた教えとされて、次のように散文で連続して対応文が現れる。

［5］如惡人吐食更欲還噉。汝亦如是。汝已得出家。何以還欲愛著。是剃髮染衣是解脱相。汝著親里不得解脱還爲愛所繫。［6］三界無常流轉不定。若親非親。雖今親里久久則滅。如是十方衆生迴轉。親里無定。是非我親。［7］人欲死時。無心無識。直視不轉。閉氣命絶。如墮闇坑。是時親里家屬安在。［8］若初生時　先世非親　今強和合作親。若當死時復非親。如是思惟不當著親。［9］如人兒死。一時三處父母俱時啼哭。誑天上父母妻子。人中亦爲誑。龍中父母亦爲誑。（坐禅274a20-b2）

ただし、［9］については、第22三啓経の偈と坐禅の［9］の文章は相当隔たっているように見える。ただ、［5］から［8］の４偈が坐禅の文章と一致していることからすれば、［9］のみが羅什の諳んじていた偈と異なっていたのかもしれない。筆者は、この偈も一連のアシュヴァゴーシャ作品の偈に違いないと考えるが、内容は同じで、韻律を変えて短くした偈が以下のように『ブッダチャリタ（Bc）』第9章第36偈として確認できる。韻律は Upajāti（11×4）である。

ihaiti hitvā svajanaṃ paratra pralabhya cehāpi punaḥ prayāti｜
gatvāpi tatrāpy aparatra gacchaty evaṃ jane tyāgini ko 'nurodhaḥ ‖ Bc 9.36 ‖

〔人は〕他世で親族を捨ててこの世に来る。この世でも〔親族を〕欺いて再び去ってゆく。

そこへ行っても、次世に去ってゆく。このように放棄を有する人に対して愛情を持てようか。

[10] gītasvanena hriyate hariṇo vadhāya vahneḥ śikhāṃ patati rūpavaśāt pataṅgaḥ｜
matsyo jale grasati cāyasam āmiṣārthī mṛtyuṃ śramañ ca viṣayārtham upaiti lokaḥ ‖
如蛾赴火、如魚呑鉤、如鹿逐聲、如渇飲鹹水、一切衆生爲欲致患無苦不至。（坐禅277c）

ガゼル（hariṇa）は呼子の声によって殺害に導かれ、蛾（pataṅga）は輝きの力（rūpavaśa）によって火焔（vahni）に落ち、魚（matsya）は肉を求めて水中で釣り針（āyasa）を呑み、世間は対境（viṣaya）を求めて死と疲労に向かう。

第19三啓経第1ダンダの偈である（Ms. 44v2）。韻律は Vasantatilakā（14×4）である。坐禅の「如渇飲鹹水」の句は梵文には見られないが、羅什の諳んじていた梵文が異なっていたか、羅什自身による付加であろう。『ブッダチャリタ』第11章第35偈（韻律は Indravajrā-Upajāti 11×4）も内容はこの偈と同じである。［1］の偈と同様、アシュヴァゴーシャは偈を短くリメイクして『ブッダチャリタ』に用いたのであろう。さらに『ブッダチャリタ』を参照したと見なされる、編集仏典の漢訳『佛本行集経』の一偈もこれと同じである[13]。漢訳からだけでは『佛本行集経』がいずれの偈を借用したのか判然としないが、第4パーダの文章からすると、『佛本行集経』は『ブッダチャリタ』ではなく、この［10］の偈、つまり『荘厳経論』の偈を借用したと見る方が自然である。以下に『佛本行集経』の偈と『ブッダチャリタ』第11章第35偈を示しておく。

山羊被殺因作聲　飛蛾投燈由火色
水魚懸鉤爲呑餌　世人趣死以境牽（佛本行集経753b）

gītair hriyante hi mṛgā vadhāya rūpārtham agnau śalabhāḥ patanti｜
matsyo girati āyasam āmiṣārthī tasmād anarthaṃ viṣayāḥ phalanti ‖ Bc 11.35 ‖
鹿（mṛga）たちは声によって殺害に導かれ、蛾（śalabha）たちは輝きを求めて火に落ち、魚（matsya）は肉を求めて釣り針を呑む。ゆえに対境（viṣaya）は不利益を結果する。

[11] sagrāhā iva nadyaḥ kanakaguhā iva ca suptaśārdūlāḥ｜
madhurāḥ śaṭhāś ca nāryo ramaṇīyā doṣavatyaś ca ‖
譬如停淵澄鏡、而蛟龍居之、金山寶窟而師子處之、當知此害不可近。（欲法286b）

鰐（grāha）のいる川の如く、眠る虎（śārdūla）のいる金鉱窟（kanakaguhā）の如く、女性〔というもの〕は、甘美であっても嘘つきで、愛らしくても過失ある〔存在〕である[14]。

第7三啓経第3ダンダの偈である（Ms. 44v2）。韻律はアールヤー（Āryā）調である。この箇所は写本写真の状態から未解読部分が残り、現時点では第3ダンダの他の偈を紹介することはできない。本稿では1偈だけの紹介にとどめるが、欲法のこの前後の文章も第7三啓経第3ダンダの偈と一致するように見える。欲法は大正蔵経の一段にも満たない短編で、前述したように羅

什訳ではないとの意見もあるが[15]、恐らくこの偈は元は『荘厳経論』の偈であり、欲法の全体は、鳩摩羅什によるアシュヴァゴーシャの失われた『荘厳経論』の散文による部分訳である可能性が高いと思う。

C）内容的に一致する例

[12] yathā niṣṭaptānāṃ trapu*madhughṛtāmedhyapaya*sāṃ
parā*mṛṣṭaṃ yat tat*[16] *priyam api dahaty apriya*m api｜
aniṣṭā veṣṭā vā bahuvividhasaṃkalpaguṇitās
tathā duḥprajñānāṃ mana iha da*hanty eva viṣa*yāḥ ‖
煮沸熱蜜、雖有色味、燒身爛口、急應捨之。若人染著妙色美味、亦復如是。（智度181b）

錫〔器〕（trapu）や蜂蜜（madhu）や酥油（ghṛta）や汚水（amedhyapayas）が煮沸された時に、好きなもの（蜂蜜や酥油）であれ、嫌なもの（汚水）であれ、〔それらが〕触れた〔身体や口〕を焼くように、同様に、望ましいものであれ、望ましくないものであれ、多種の分別によって増大した対境（viṣaya）はこの世で無知な者たちの心を焼く。

鳩摩羅什訳文献には、アシュヴァゴーシャの偈をそのまま韻文あるいは漢訳で翻訳した文章以外に、その偈が背景にあると思われる文章も存在する。本稿ではそのような例をふたつ紹介する。まず、第19三啓経第1ダンダの偈である（Ms. 44v2-3）。韻律は Śikhariṇī（17×4）である。複雑な構造の偈であり、智度の散文は偈の逐語的な翻訳とは言えないが、内容は同じである。この偈が背後に存在することは間違いないであろう。偈の出自については新たな発見もここで報告できる。同じ偈が『舎利弗劇』に認められるのである。断片しか回収されていないが、リューデルス（Heinrich Lüders, 1869-1943）のローマ字転写から対応箇所を示せば以下の通りである。［12］で斜体で示した部分が一致する。

Lüders 1911:193, Śāriputraprakaraṇa, C2, Vorderseite
4. . . . . *madhughṛtā[meddhyapay]* . . . . . *spṛṣṭaṃ [yat = tat = priya]m = api dahaty = apriya* . . . . . *[h]. tty = eva viṣa* . .

クチャで発見された貝葉写本断簡に基づくリューデルスの出版では一部しか文章が回収されず、意味も不明であった貴重な偈が第19三啓経第１ダンダから完全に回収される。ただし、偈の真のオリジナルが『舎利弗劇』であったのか、『舎利弗劇』も『荘厳経論』の偈から借りて用いたのか確実なことは言えない。ただ、これがアシュヴァゴーシャ作品の偈であったことは、『舎利弗劇』に同じ偈が発見されたことによって証明されたといえよう。

[13] viśīrṇaparṇā iva jīrṇavṛkṣās tuṣāradagdhā iva padmaṣaṇḍāḥ｜
prabhraṣṭaśīlāḥ puruṣā na bhānti prabhraṣṭarājyā iva bhūmipālāḥ ‖
破戒之人失諸功德。譬如枯樹、人不愛樂。破戒之人如霜蓮花、人不喜見。（智度154b）

葉（parṇa）の落ちた老木の如く、寒さ（tuṣāra）に痛めつけられた蓮の群れの如く、領土（rājya）を失った王の如く、戒を失った者たちが輝くことはない。

第23三啓経第3ダンダの偈である（Ms. 57v4）。韻律は Upajāti（11×4）である。智度の散文は、戒波羅蜜をめぐる長文の解説の中で、破戒の喩えを述べる一段に含まれる。この文章は［13］を翻訳したものではないが、両者の喩えは共通している。この一段に先立つ智度の戒論冒頭部の一段は『荘厳経論』の偈を韻文と散文で翻訳して埋め込んだものに他ならないことがすでに筆者によって明らかにされている（松田2021b）。

4　第11三啓『無常経』に見られる群鳥の喩え

梵文写本に含まれる40種の三啓経の中で、最も問題を孕む三啓経が11番目に記された『無常経（*Anityatā-sūtra*）』である。研究者の間で「三啓」が注目されたのは、三啓経としての義浄訳『無常経』とアシュヴァゴーシャとの関係に対する関心から始まったことでもあり、梵文『三啓集』写本を解読して世に問うのであれば、真っ先に11番の『無常経』を解読して梵文テキストと和訳を提示し、義浄訳『無常経』と比較すべきではあるが、その箇所は写真の状態が良くないこともあって、解読は一筋縄ではいかない。これを正しく、さらに写真では不鮮明な箇所について想像力を働かせて読むには、梵文写本や仏教文献に対する高度な知識が要求されることは当然であるが、問題は、梵文『三啓集』に収められた11番『無常経』が義浄訳『無常経』とは大きく異なっていることである。第2ダンダの経典部分の解読は特に問題はなく、梵文写本と義浄訳は基本的に同じであり、筆者も解読をすでに終えている。ただし、第1ダンダの偈は義浄訳のそれとは大きく異なり、冒頭の三帰依偈も全く別物である。三帰依偈に続く1.3の段落の偈も両者間で共通点はほとんど見られない。第3ダンダの偈については、異なる点は多いものの、義浄訳の偈と共通する偈は多く認められる。筆者も共同研究者のイェンス＝ウヴェ・ハルトマンも、現時点では、第1ダンダについては、所謂「歯が立たない」状態にある。従って、梵文『三啓集』写本に含まれる『無常経』の全体像を示すことはここではできないが、第3ダンダの一部の偈については紹介することは可能である。その中に、群鳥の喩えを説く次のような偈が含まれる。義浄訳『無常経』の第3ダンダに見られる漢訳偈と共に示そう。和訳は梵文からの翻訳である（Ms. 22r5）。

sāyaṃ sāyaṃ vāsavṛkṣe sametāḥ prātaḥ prātas tena tenopayānti｜
tyaktvānyonyaṃ taṃ ca vṛkṣaṃ vihaṅgā yadvat tadvad bāndhavā bāndhavāṃś ca ‖
譬如群宿鳥　夜聚旦隨飛　死去別親知　乖離亦如是（大正801, 17巻, 764a25-26）

鳥（vihaṅga）たちが毎晩ねぐらの木（vāsavṛkṣa）に集まり、毎朝お互いとその木の〔両方を〕を捨てて、それぞれ〔の方角〕に向かって〔飛んで〕行くように、同様に親族（bāndhava）たちは親族たちを〔捨てて去って行く。〕

韻律は Śālinī（11×4）である。とても印象的で、リズム感のある美しい偈である。梵文と義浄訳は同じであるが、義浄訳を用いて、1949年になって公刊された Lin Li-kouang（林藜光 1902-1945）の指摘以来、この偈が『サウンダラナンダ（Saund）』第15章第33偈に類似することが言われてきたが[17]、『ブッダチャリタ』第6章第46偈も同様の喩えを説く。筆者の見るところ、群鳥の喩えはアシュヴァゴーシャの十八番だったのかも知れぬ。両者を以下に示そう。

vihagānāṃ yathā sāyaṃ tatra tatra samāgamaḥ｜
jātau jātau tathāśleṣo janasya svajanasya ca ‖ Saund 15.33 ‖

鳥（vihaṅga）たちが夜それぞれの所に集まるように、それぞれの生における人と親族の結びつきも同様である。

vāsavṛkṣe samāgamya vigacchanti yathāṇḍajāḥ｜
niyataṃ viprayogāntas tathā bhūtasamāgamaḥ ‖ Bc 6.46 ‖

鳥（aṇḍaja）たちがねぐらの木（vāsavṛkṣa）に集まり去って行くように、有情たちの集まりは必ず別離に終わる。

これら『サウンダラナンダ』と『ブッダチャリタ』に含まれるシュローカ偈と『無常経』第3ダンダのシャーリニー調の偈の偈を比べると、意図する内容は全く同じで、『無常経』の偈が二つより長文で作偈されていることが分かる。さらに、この『無常経』の偈と梵文原典が同じであったと思われる偈が、鳩摩羅什の坐禅では散文で、さらに［10］の項で言及した『佛本行集経』では偈形で次のように現れる。

譬如鳥栖暮集一樹、晨飛各隨縁去、家屬親里亦復如是。（坐禅274a8-9）

譬如大樹衆鳥群　各從諸方來共宿
後日別飛各自去　衆生離別亦復然（佛本行集経736a7-8）

松濤誠廉は、この一文を含む、坐禅における親族尋（jñātivitarka）の段落を『サウンダラナンダ』第15章第31-41偈に同定したことから（松濤1954）、この一文を『サウンダラナンダ』第15章第33偈であるとみなすが、上述のように、意味内容は同じであるが、『サウンダラナンダ』の偈は『無常経』第3ダンダの偈とは文章の長さが全く異なる。偈の梵文原典が明らかになったことで、それと比較すると、坐禅の一文も『佛本行集経』の偈も、『サウンダラナンダ』や『ブッダチャリタ』ではなく、『無常経』第3ダンダの偈に一致することが明白である。となると、羅什は『サウンダラナンダ』第15章第31-41偈を坐禅の親族尋の項で用いながら、なぜ一偈だけ『無常経』と同じ偈に変えたのであろうか。筆者の考えはこうである。松濤誠廉が坐禅の中に発見した『サウンダラナンダ』第15章第31-41偈とみなす偈については、その原梵文は、いずれの偈も『サウンダラナンダ』より長く、同じ内容の偈が『荘厳経論』に並んでいたと考えれば、すべての説明がつくように思える。11番『無常経』の編纂者は、『荘厳経論』に含まれる群鳥の比喩を説く偈を第3ダンダに改作せずにそのまま使い、『佛本行集経』の編者も同様にそのまま借用し、羅什はその前後の偈も含めて坐禅において散文化して取り込んだのではな

いか。つまり、松濤誠廉が『サウンダラナンダ』に同定したように見えた一連の偈は、『サウンダラナンダ』の偈ではなく、『荘厳経論』の偈であったのである。一方、アシュヴァゴーシャ自身は、この偈を『サウンダラナンダ』第15章第33偈および『ブッダチャリタ』第6章第46偈として短いシュローカ偈でリメイクしたのであろう。無論、第33偈を含む『サウンダラナンダ』第15章の31-41偈も『荘厳経論』の偈を基にしたアシュヴァゴーシャ自身による改作であろう。内容的には同じであるから、坐禅の文面からは、それが『サウンダラナンダ』の偈のように見えてもおかしくはない[18]。

さらに、この群鳥の偈について、最近筆者は重要な事実に気づいた。ドイツ探検隊の蒐集したトルファン写本コレクションに、SHT 25および SHT 26の登録番号がつけられた一連の梵文貝葉写本がある。両者で合計161葉になる大きな断簡集である。このうち、SHT 26については、すでにディーター・シュリングロフ（Dieter Schlingloff）によってサンガセーナ（Saṅghasena）の「ジャータカ集」に同定されていたが、独マールブルク大学の出本充代博士によって、最近素晴らしい校訂本が出版された（Demoto 2021）。もうひとつの SHT 25はミュンヘン大学のメッテ（Adelheid Mette）によって部分的に出版されただけで（Mette 2007）、まだ全貌は明らかになっていない。筆者は、ハルトマンから提供された、リューデルス夫人（Else Lüders）によるローマ字転写にクラウス・ヴィレー（Klaus Wille）が手を加えた未発表のファイルと SHT 25の写真と比較して、Mette 2007には含まれない断簡（SHT 25/21V）の1行目から2行目に次のような驚く文章を見いだした。

1 ... hi ca guṇair mudito gṛhāṇa ca・jñātivitarke・sā– – – – ˘ – – ˘ – × | – – – – – ˘ – – ˘ – × |
2 – – – – – ˘ – – ˘ – × yadvat tadvad bāndhavā bāndhavā<ṃ>ś ca・

わずかな断片にすぎないが、1行目の途中の「親族尋（jñātivitarka）にかんして」という見出し語の後に書かれている文字列は、ここで取り上げている第11三啓経『無常経』の群鳥の喩えの偈そのものである。SHT 25はカーヴィヤ形式の韻文によって仏教用語を解説した詩文集とみなされているが、この写本は『荘厳経論』自体を書写した写本である可能性がある。ただ、Mette 2007に出版された部分も含めて、SHT 25には様々な韻律の多くの偈が含まれるが、今の所、この偈以外に『三啓経』に含まれる偈と同じ偈は見いだされていない[19]。

5　おわりに―起点としての『荘厳経論』―

最後にさらに1偈紹介して『荘厳経論』の性格と三啓経としての『無常経』の誕生について筆者の考えを述べておきたい。『無常経』の第3ダンダでは、ここで取り上げた群鳥の比喩の偈の二つ後に次のような偈が現れる（Ms. 22v1）。

paśur iva vahanāya yoktrito jhaṣa iva vāriṇi jālasaṃvṛtaḥ |
mṛgakulam iva vāgurāvṛtaṃ jagad avaśaṃ maraṇāya tiṣṭhati ||

運搬用に軛をつけられた家畜のように、水中で網にかかった魚のように、罠にかかった野生獣のように、力なき世間は死に瀕している。

この偈に説かれる喩えも大変印象的であるが、義浄訳『無常経』の第3ダンダにこの偈は存在しない。また筆者はこの偈の対応文を羅什訳文献に見いだしてもいない。ただ、同じ偈は第9三啓経の第1ダンダ（Ms. 17v1-2）と第38三啓経の第1ダンダ（Ms. 106r3）にも現れる。韻律は Aparavaktra（11+12×2）である。すぐ前の群鳥の偈とは韻律が異なる。第11三啓経の『無常経』に含まれる偈には様々な韻律が用いられている。偈が変わる毎に韻律も変わるといった有様である。『荘厳経論』から様々な偈が取り出されて、三啓経としての『無常経』の第1ダンダと第3ダンダが編纂されたことは想像に難くない。義浄や梵文写本の奥書が伝えるような、三啓経の編纂者あるいは作者をアシュヴァゴーシャとみなす伝承ができたのも、用いられた偈の多くがアシュヴァゴーシャ作品から取られた偈であったことにあると思う。無論、40種の三啓経の中には、アシュヴァゴーシャ自身が編纂に関わった三啓経が存在する可能性もゼロではないであろう。『無常経』に用いられた様々な韻律の偈が、元は『荘厳経論』の偈であったのであれば、同じ内容を短く改作した偈が『サウンダラナンダ』と『ブッダチャリタ』に現れるのも当然の話である。別稿でも書いたが（松田2021b）、全編カーヴィア調の韻文で綴られたと推定される『荘厳経論』は、アシュヴァゴーシャにとって著作活動の起点となった巨大作品であり、その後の作品のカードボックスか資料集のような役割を果たしたのではないかと筆者は考えている[20]。

では、梵文『三啓集』に収められた第11三啓経としての『無常経』の偈、特に第1ダンダの偈は義浄訳『無常経』の偈となぜ大きく異なっているのであろうか。それに答えるには、『無常経』全体の解読を終えてからでないと確定的なことは言えないであろうが、恐らく『無常経』は、40種の三啓経の中で、当時のインドでは最も人口に膾炙した三啓経であり、時代が下がれば下がるほど様々なヴァージョンが誕生したのではないか。第2ダンダに用いられたブッダ金口の阿含経典の文章が変えられることはなかったが、第1ダンダと第3ダンダのアシュヴァゴーシャ作品の偈を自由に入れ替えたり、追加したりすることは誰にでも可能であったはずである。義浄訳『無常経』の元になった現存しない梵文原典も、ポカン僧院に保存されていた梵文『三啓集』に含まれて現存する『無常経』も、そのような様々な梵文ヴァージョンの中のひとつであったと思う。さらに、この二つとは異なるヴァージョンがあっても不思議ではない。ただ、いずれのヴァージョンも貴重なアシュヴァゴーシャ作品偈を含んでいたであろうことは疑いようがない[21]。

〔参考文献〕

Demoto, Mitsuyo（出本充代）. 2021. “Sanskrit Fragments of Saṃghasena's *Bodhisattvāvadānamālā*”,

South Asian Classical Studies (南アジア古典学) 16: 1-50.

Hahn, Michael. 2012. “Vararuci's *Gāthāśataka (Tshigs su bcad pa brgya pa)* and its Indian Sources”, *South Asian Classical Studies* (南アジア古典学) 7: 367-458.

Johnston, E. H. 1928. *The Saundarananda of Aśvaghoṣa*, Oxford University Press.

——— **1935.** *The Buddhacarita Or Acts of the Buddha,* Part 1 -Sanskrit Text, Baptest Mission Press.

Lin, Li-kouang. 1949. “Appendice VII: Sur le sūtra tripartite d'Aśvaghoṣa”, *L'aide-Mémoire de la vraie loi (Saddharma-sṃtyupasthāna-sūtra)*, Paris, 303-305.

Lüders, Heinrich. 1911. “Das Śāriputraprakaraṇa, ein Drama des Aśvaghoṣa” (*Philologica Indica,* 1940:190-213).

Mette, Adelheid. 2007. “Buddhistische Sanskritstrophen aus dem Rotkuppelraum der Mig-öi von Qizil Proben aus der Fragmentsammlung SHT 25”, *Indica et Tibetica-Festschrift für Michael Hahn, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde,* 66. Wien: 351-368.

Shastri, Haraprasad. 1939. *Saundarananda Kāvya of Ārya Bhadanta Aśvaghoṣa*, Calcutta.

上野牧生 2015「アシュヴァゴーシャの失われた荘厳経論」『インド論理学研究』8: 203-234.

——— **2020**「第29三啓経（八難経）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111:（21）-（46）.

——— **2021**「増一阿含の二経典（1）――第30三啓経（五事経）の梵文テキストと和訳――」『大谷学報』101-1:（1）-（28）.

上野牧生・松田和信 2021「アシュヴァゴーシャからヴァスヴァンドゥへ――釈軌論と倶舎論に見る法滅観と馬鳴の詩作品――」『仏教学セミナー』113（近刊）.

岡野　潔 1988「仏本行集経の編纂と Lalitavistara」『印度学仏教学研究』37-1:（83）-（86）.

——— **1991**「ブッダチャリタの改作仏伝について―仏本行集経と方広大荘厳経に用いられた未知の仏伝―」『東北大学印度学講座六十五周年記念論集―インド思想における人間観』57-77.

梶山雄一・御牧克己（他）1985.『ブッダチャリタ』原始仏典第10巻、講談社、1985年. 2019年4月に講談社学術文庫2549『完訳ブッダチャリタ』として再刊。

菅野龍清 1995「大智度論における馬鳴著作の引用について」『印度学仏教学研究』43-2: 194-197.

——— **1996**「馬鳴の著作に関する覚え書き」『仏教学論集』立正大学大学院20:13-24.

——— **2002**「鳩摩羅什訳禅経類について」『佐々木孝憲博士古稀記念論集―仏教学仏教史論集』山喜房佛書林、77-90.

木村宣彰 2009『中国仏教思想史研究』法蔵館.

齊藤隆信 2013『漢訳仏典における偈の研究』法蔵館.

菅原泰典 2000『経集部小経解題』仙台（私家版）.

田中裕成 2019a「『サウンダラナンダ』16.30-33にみる二つの系統」『印度学仏教学研究』67-2: 999-994.

——— **2019b**「『禅法要解』に組み込まれた『サウンダラナンダ』の四諦説」『佛教大学仏教学会紀要』24: 81-94.

——— **2020**「三啓集に収められたサウンダラナンダの異読について」『佛教大学仏教学会紀要』25: 91-109.

松田和信 2019「三啓集（*Tridaṇḍamālā*）における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.

——— **2020a**「ブッダチャリタ第16章に見られるアートマン批判」『インド論理学研究』12（未刊）.

——— **2020b**「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」―梵文テキストと和訳―」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.

——— **2020c**「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ―如来十号論に埋め込まれた荘厳経論―」『印度学仏教学研究』69-1:（53）-（61）.

――― **2021a**「不浄観を説く中阿含139経―三啓集から回収された梵文テキストと和訳―」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.

――― **2021b**「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ―戒論に埋め込まれた荘厳経論―」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69).

松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳 2022「毒蛇の喩え―第26三啓経の梵文テキストと和訳―」『佛教大学仏教学会紀要』27（近刊）.

松濤誠廉 1954「瑜伽行派の祖としての馬鳴」『大正大学研究紀要』39, 『馬鳴　端正なる難陀』山喜房佛書林（1981）158-181所収.

水野弘元 1957「禅宗成立以前のシナの禅定思想史序説」『駒澤大学研究紀要』15: 15-54.

八尾　史 2013『根本説一切有部律薬事』連合出版.

〔注〕

⑴　詳細については松田2019, 2020a, 2020b, 2021a 等を参照していただきたい。ここに略説した内容に関わる参照文献等は本稿では注記しない。

⑵　松田2019では写本の葉数を116と書いた。これは、最終葉の葉番号が116であり、途中の第107葉が欠落しているためであったが、その後、これが間違っていたことが分かった。第107葉の表記が欠落しているだけで、文章は第106葉から第108葉に続いていた。書写生による葉番号の書き間違いであった。これを筆者に指摘してくれたのは大谷大学の上野牧生氏であった。従って梵文『三啓経』写本は全体で115葉からなり、1葉の欠落もない完全な写本である。

⑶　アシュヴァゴーシャの所属教団と、『三啓集』に使われた経典が説一切有部の阿含から取られた経典であることについては松田2021a: 65-68に述べた。

⑷　松田2020c, 2021b 参照。

⑸　水野弘元1957：22参照。書誌については、菅原泰典2000の『菩薩訶色欲法経』の項参照。羅什訳文献の各々については、木村宣彰2009：201-276に要領よく明確にまとめられている。

⑹　菅野龍清1995、同2002、上野牧生2015参照。

⑺　田中裕成2019a, 同2019b, 同2020参照。田中の発見に先立って菅野龍清2002：83-85も『サウンダラナンダ』第14章の三つの偈が『禅法要解』の文章に一致することを指摘している。ただし、両氏の指摘については、今後は本稿注⒅で述べる点に留意すべきである。

⑻　本稿での梵文テキストについては書写生の書き癖をすべて正規形に戻し、代用アヌスヴァーラも修正した。

⑼　『ブッダチャリタ』第20章の梵文は失われているので、第35偈のチベット語訳を示しておきたい。ハルトマンより提供された Roland Steiner の校訂本（未出版）から引用する。| 'byung po 'dzin pa'i sa yang zad par 'gro ba ste | | 'jig pa'i mes ni lhun po de bzhin sreg par byed | | rgya mtsho chen po yongs su bskams par 'gro ba ste | | dbu ba dang mtshungs mi yi 'jig rten kye ma ci | チベット語訳からの和訳は、梶山雄一、御牧克己（他）1985：232参照。

⑽　齊藤隆信2013：424-423。松田2019注⒅にも別箇所の同様の例を述べた。

⑾　アシュヴァカとプナルヴァスカの二比丘の物語については八尾史2013：235-236参照。

⑿　なお［3］の偈はヴァスヴァンドゥ（世親）の『釈軌論（*Vyākhyāyukti*）』第5章にも引用されるが、アシュヴァゴーシャの名前は示されない。『荘厳経論』から借用して『三啓集』に使われた偈で、『釈軌論』に引用される偈は他にも複数確認されている。詳細については、上野牧生・松田和信2021に紹介しているので参照していただきたい。

⒀　大正190、大正蔵3巻所収。『佛本行集経』の性格については、岡野潔1988、同1991参照。

⒁　この偈については、浙江大学の堀内俊郎副教授と個人的なやりとりを経て正しい理解に至ることができた。お礼申し上げる。

⒂　本稿注⑷参照。

⒃　写本では yadvat と書かれているが yat tat に修正する。

⑰ Lin Li-kouang 1949では『サウンダラナンダ』第15章第34偈と指摘するが、これは Shastri 1939に基づく偈番号。Johnston 1928では第15章第33偈である。菅野龍清1996は Lin Li-kouang の指摘を検証して有益な示唆を述べている。本稿［1］の偈の項において、『ブッダチャリタ』第20章第35偈が［1］の偈を短くリメイクしたものであると述べたが、菅野はそれと類似する偈が義浄訳『無常経』に存することを指摘する。ただ、菅野の指摘する偈は第1ダンダの偈であり、梵文第11三啓経の第1ダンダにはそれに対応する偈は存在しない。後述のヴァージョン違いによると思われる。さらに菅野は Lin Li-kouang に従って、義浄訳『無常経』の「明眼無過慧　黒闇不過癡　病不越怨家　大怖無過死（v.17, 746a17-18）」を『サウンダラナンダ』第5章第27偈と同内容と見なして梵文を提示するが、この漢訳偈に対応する梵文は、nāsti prajñāsamaṃ cakṣur nāsti mohasamaṃ tamaḥ | nāsti vyādhisamaḥ śatrur nāsti mṛtyusamaṃ bhayam ‖ であり、似てはいるが、第5章第27偈とは異なる。なお、この偈は後代、ヴァラルチ（Vararuci）に帰せられる *Gāthā-śataka* 第95偈として再登場する（Hahn 2012:439-440）。

⑱ 筆者の推測が正しいなら、他の羅什訳文献におけるアシュヴァゴーシャ作品の引用と思われる箇所すべてにこれが当てはまるのではないか。例えば、菅野龍清1995、同2002および上野牧生2015：209-211の両者は智度の中に『ブッダチャリタ』と『サウンダラナンダ』の偈の引用および散文の同一文を複数指摘するが、智度における偈あるいは対応散文の順序は、いずれも『ブッダチャリタ』および『サウンダラナンダ』の偈の並び順と一部異なるか、相当異なるものが多く、さらに翻訳が抜け落ちている偈も多く認められる。筆者も最初はそのような相違が羅什の自由訳の特徴のように思っていたが、そうではなくて、『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の偈と意味を同じくするが、より長い韻律の偈が、智度に見られる通りの順番で『荘厳経論』の中に並んでいたと見たらどうであろうか。つまり、羅什は『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』からではなく、『荘厳経論』から偈を借用して智度に使ったのではないか。図らずもその証拠の一端が菅野龍清1995：195-196の指摘に垣間見える。菅野氏は『ブッダチャリタ』第23章17偈から25偈（筆者の見るところでは16偈から24偈）に相当する文章が智度における持戒の功徳を述べる散文に一致すると述べるが、この箇所は、松田2021b で証拠を示して述べたたように、羅什が『荘厳経論』の偈を借用して散文と韻文で埋め込んだ箇所に他ならない。菅野氏が「偈の順番に従えば多少順不同」と言うのは、それが『ブッダチャリタ』ではなく、『荘厳経論』の偈だからである。羅什は偈を散文に変えても、その順番を変えたりはしていないのである。さらに同じ松田2021b の最後に述べたように、アシュヴァゴーシャは『荘厳経論』に含まれる Vaṃśastha（12×4）調の偈をシュローカに改作し、順番も変えて『ブッダチャリタ』第23章に使ったのである。なお、菅野氏の研究はその当時としては大発見であり、『荘厳経論』の偈が明らかになった現在でもその価値を決して失ってはいない。それらが『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』であるという菅野氏の指摘を『荘厳経論』と変えれば良いだけである。菅野氏は、羅什が偈の出典について一部で「禅経」などと言うだけで、『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の具体名に一切言及しない点について、両者から直接引用したのではなく、両者から抜き出された、ある種のアシュヴァゴーシャ作品ノート（アシュヴァゴーシャ・アンソロジー！）のような物を羅什が所持していて、それから翻訳したからではないかと述べる。本稿の最後に述べるように、筆者の推定では、『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』とは成立順は逆になり、もっと巨大で、韻律の異なる偈による著作になるが、それこそがアシュヴァゴーシャの『荘厳経論』に他ならないのである。なお、申し訳ないことに、松田2021b において筆者は智度の戒にかんする菅野氏の指摘を注記することを失念していた。この場を借りてお詫び申し上げる。

⑲ SHT 25とは別に、SHT378の登録番号の付いた3葉のトルファン写本断簡も『荘厳経論』写本の可能性が高いことをすでに述べた。松田2021b の論末参照。SHT378には『三啓集』と同じ偈が多く含まれている。

⑳ 本稿第1節で指摘したように梵文『三啓集』には『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の偈が多く借用されて使われている。本稿注⑱に述べた筆者の推測とも関連するが、『ブッダ

チャリタ』や『サウンダラナンダ』の偈以外にも、それらと内容的には全く同じではあるが、より長い韻律の偈が『三啓集』には多く認められる。その逆の、内容は同じであるが文章が短い偈は認められない。比較のために本稿で引用した『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の偈も同様である。本稿の処々でも触れたが、アシュヴァゴーシャは既存の長い偈を短い韻律の偈に改作して『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』に使ったのではないか。つまり、長い偈が先行してアシュヴァゴーシャによって作られたのであり、それらはいずれも『荘厳経論』のために作られた偈であった可能性が高いように思える。この点からも『荘厳経論』がアシュヴァゴーシャにとって著作活動の起点となる詩作品であったことが見て取れると筆者は思っている。さらに、『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』と全く同じ偈であっても、それらがそのままの形で『荘厳経論』の中に存在していたとしても不思議ではないとも思っている。ただ個々の偈についてそれを証明するには、松田2020c や2021b に書いたような、タイトルを附しての他文献における引用か、『荘厳経論』というタイトルを記した梵文写本でも発見されない限り不可能ではあるが。

⑵1 筆者とイェンス=ウヴェ・ハルトマンは『無常経』全体の解読を今後出本充代博士の助力を得て行いたいと考えている。梵文写本解読と仏教文学研究に豊富な知識と経験を持つ出本博士が加われば、近い将来『無常経』の全貌が明らかになる日が来ることも不可能ではないであろう。しかし、40種の三啓経の解読をすべて終え、梵文テキストと翻訳を公開できる日が果たしていつになるのか、解読開始から3年を経た現在、筆者もハルトマンも今なお全貌の見えない写本の森を彷徨う状態にある。最後に一言出本博士に御礼を述べておきたい。本稿で紹介した偈のテキストと和訳は事前に出本博士に見ていただいた。特に［6］の偈が正しく理解できたと自信を持って言えるのも、出本博士との間で正しい理解に至る数度のやりとりを経たからである。

（まつだ　かずのぶ　仏教学科）

2021年11月15日受理